

| | |
|------------|---|
| Title | 復帰前後の図書館事情 |
| Author(s) | 山田, 勉 |
| Citation | 浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(9): 77-86 |
| Issue Date | 1998-03-24 |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12001/24206 |
| Rights | 浦添市立図書館 |

復帰前後の図書館事情

山田 勉

まえがき

琉球列島は敗戦から祖国復帰までの27年間米国の統治下であり、アメリカ軍政府、1950年以降は米国民政府（USCAR＝United States Civil Administration of the Ryukyu Islands）の下に沖縄諮詢会（1945－1946）、沖縄民政府（1946－1950）、沖縄群島政府（1950－1952）、そして1952（昭和27）年4月1日以降は琉球政府があった。戦前の県立沖縄図書館の最後の館長であった城間朝教は、いち早く図書館の再建に動きだし、1946（昭和21）年に図書館再建に関する意見書を知事に提出している。1947年2月に沖縄民政府知事から軍政府に図書館設立申請書が送られ、3月に認可されて、4月に石川分館、8月に民政府構内に中央館、10月に首里分館、11月に名護分館が設置をみている。蔵書は4館合わせて2,700冊にすぎなかった。

1951（昭和26）年に中央館を那覇市に新築移転した際に軍政府の直轄となり、その前年に新築された名護・石川の両分館も軍政府直轄となって、名称も3館とも文化情報会館となった。首里分館はとりのこされたので、独立して首里図書館となり、これが後に琉球政府立中央図書館として発展していく事になる。

1. 琉米文化会館の設立とその活動

軍政府情報教育部の直轄となった3文化情

報会館は翌年（1951年）には更に名称を琉米文化会館と改称した。これより先、1950（昭和25）年には名瀬市に奄美琉米文化会館が開館、1952（昭和27）年に平良市に宮古琉米文化会館、石垣市に八重山琉米文化会館が設置されている。戦後から祖国復帰まではこれらの文化会館が沖縄の公共図書館界をリードしてきた。奄美琉米文化会館は奄美大島の日本復帰1953（昭和28）年12月25日により、奄美文化会館となり、鹿児島県に移管された。

那覇文化会館と同敷地内に、配本所（Processing Unit）と視聴覚資料センターがあり、配本所では集中整理が行われ、各文化会館へ資料（図書）と目録記入カードや消耗品の配付を行っていた。

琉米文化会館の目的は「アメリカ合衆国に関する情報を提供するだけでなく、アメリカに対する友好的態度を確立することと琉球の復興を援助することである。」と『米国民政府報告1952』に述べられている。要するに軍政による宣撫工作である。しかし、幸いにも軍政府の文化会館担当者は日系人であったので、親しみやすく利用しやすい運営がなされていたと評価できるであろう。その活動は極めて多彩であった。移動文化会館と称して、ブックモビルに図書だけでなく視聴覚器材や資料を積み込んで、町や村々をまわり、昼間は図書貸出、紙芝居、人形劇、スクエアダンス等を行い、夜は映写会を催していた。組織は図書部と行事部に分かれていて、館内行事としては、ダンス講習会、英語講座、映写会、

読書会、レコードコンサート、料理講習会等あらゆる文化活動を行っている観があった。

2. 首里図書館から琉球政府立中央図書館へ

玉城村親慶原の沖縄民政府（知念地区にあったので通称は知念の民政府）構内にあった沖縄中央図書館の3分館の一つであった首里分館は首里市役所の会議室に1947（昭和22）年10月15日に設置された。「1951年に中央館と他の2分館が軍政府直轄になったが、首里分館は沖縄民政府の管轄として残り、首里図書館と改称した。その後、沖縄群島政府に引き継がれ、1954年4月1日琉球政府の創立と共に、琉球政府に移管された。宮古群島政府と八重山群島政府も琉球政府に統合されたので、宮古図書館と八重山図書館も琉球政府立となり、三つの政府立図書館ができた。1964年3月6日現在地の寄宮（与儀公園内にあるので通称地名は与儀）に新館が完工したので移転し、中央図書館と称するようになった。同構内にあった東恩納文庫を1964年12月に吸収合併している。」⁽¹⁾ 1965年1月正式に琉球政府立中央図書館となり、宮古、八重山の図書館はそれぞれ宮古分館、八重山分館となった。

3. 沖縄に本を贈る運動

昭和45年度全国図書館大会は広島市で開催されたが、広島市公会堂での開会式で「沖縄に本を贈る運動—沖縄図書館界に対する援助アピール—」が提唱された。日本図書館協会常務理事の酒井梯（さかい、やすし）氏が次のように述べられた。氏は当時国立国会図書館連絡部長であった。

「昭和45年度全国図書館大会にご参集のみなさま、私は日本図書館協会の常務理事会の決定にもとづきその代表としましてこの大会にご参加のみなさまに対し、一つの提案を

行いご賛同をたまわりたいと考えるものでございます。それは全日本国民の悲願とも言える沖縄の本土復帰を2年後に控えている現在、この全国図書館大会の席上におきまして、沖縄図書館界の復興とその再建に対する援助のアピールをおこないたいということでございます。…略…何よりも私の心をうちましたのは、沖縄の図書館の方々が文字どおり一致協力して、しかも乏しい経費と貧弱なる図書館資料を駆使して昼夜をわかたぬ活発な図書館活動を展開しております。…略…琉球政府は那覇市に政府立中央図書館を建設しましたが建物こそ3階建て570坪ですが、図書館資料はわずかに17,000冊でございます。加うるに維持費とか管理費とかその他の極端な不足によりまして、図書館として利用されている部分はわずかに1階180坪でございます。2階3階になりますと、備品もなければ、何の設備もできておりません。ただ『視聴覚室』だとか『マイクロフィルム複写室』という室名の名札のみが、空しく明日を待っているのみで内部は全くのがらんどでございます。もう一つ政府立医学図書館というのがございます。これは日本政府が4年前、約3,300万円の経費を負担することによりまして2階建300坪の図書館が建てられ、現在7名の職員によって運営されております。所が従来年間720万円の図書購入費を使っておりましたところ、琉球政府の直轄となりますとこれがたちまち180万円に減額されまして四苦八苦の状態に陥っていることを確認いたしました。沖縄の代表的な政府立の図書館でさえこの様なありさまでございます。…略…みなさまは終戦直後のあの食料難の時代をお忘れではないと存じます。一粒の米をいかに大切にしましたでありましょうか。一椀のお米の飯をいかにありがたかったでありましょうか。今の沖縄の図書館界にとりましては、1冊の雑誌は一粒のお米に等しゅうございます。1冊の図書は一椀のご飯にも相当するほど貴重な

ものになっております。…略…

沖縄図書館界の復興と再建のために準備されるであろう日本政府の経費ともうしますのは、従来の実績からみましても、決して大きな期待をもつわけにはまいらぬと考えるものでございます。私達は2年後に沖縄の図書館を日本の図書館界に迎え入れます。本土復帰を千秋の想いで待っている沖縄の図書館界の人々に本土にいる我々は断じて復帰の喜びというものを失望の涙にかえてはならないと考えるものであります。政府予算が十分に期待できない以上、そこは我々図書館関係者の努力と協力によりまして、できうる限りの援助を行わなければ、一体誰が沖縄の図書館を助けるでございましょう。…略… 日本図書館協会は全日本の図書館、出版界、文化界、その他関係の機関に対しまして、図書の供出、寄贈の運動を展開し、これを沖縄の図書館に贈ることによりまして本土復帰のお祝いのしるしとしたいと考えております。今その具体策というものを理事会において検討しておりますけれど、その成案を見たあかつきにはなにとぞできうるかぎりのご協力をいただきたいとこの大会の席上をかりまして心からお願い申しあげるしだいでございます。…後略…」

②このアピールに応えて、多くの機関や個人から大量の図書や雑誌の寄贈があった。この事について翌年の昭和46年度全国図書館大会の岐阜大会で、酒井梯氏によって「沖縄に本を贈る運動事後処理報告」が次のようになされた。

「全国図書館大会にご来会の皆様、私は昨年広島市に於いて開かれましたこの同じ大会の席上において、日本図書館協会理事会を代表して、本土復帰を目撃の間に控え、しかも設備の貧困と資料の不足に悩む沖縄の図書館界に対し、本土の図書館として、また同じ図書館人として、なし得る限りの援助を行い、設備と資料の貧困にもめげず、日夜真剣な活躍を続けておられる沖縄図書館界の皆様の期

待に応えようではないかとのアピールを行いました。幸いに、このアピールは、全参加者二千名の満場破れるばかりの大拍手のうちに採択されましたことを、皆様とともに今なお感動の念をもって想い起こす者でございます。

そして本年のこの岐阜大会の席上に於いて、そのアピールの事後処理について、十分な満足な結果を得たとは申せませんが、ある程度の成功を収めつつあることをご報告申し上げることが出来ますことを心から喜びとするものでございます。すなわち、出版界からは日本放送出版協会の新刊書3,090冊を皮切りとして幾多のご寄贈があり、また各図書館からは、国立国会図書館の約4,300冊、またその支部図書館から約1,000冊、東京大学図書館から1,500冊、一つ橋大学図書館より3,000冊、シオノギ製薬研究所より800冊、また個人の蔵書よりの図書館学関係の図書290冊、これらのものを主なものといたしまして、計13,000冊を、或いは国立国会図書館を通じて、或いは供出機関より直接沖縄図書館界に送付致しました。この外、東京大学医学図書館からは20,000冊に近い医学雑誌の寄贈の申込を受けており、個人からのお申出のものもございしますが、これらは、今後の送付にまかすことにいたします。以上は私たちが直接取扱い或いは通知を受けたものだけの数字であり、私たちの知らないところでこれ以外にも寄贈があったと信じます。…後略…」③。

この事後報告の後、沖縄図書館協会を代表して、「沖縄に本を贈る運動」によるご寄贈に対して、山田が謝辞を述べた。

「…前略… 先ず、協会の皆様方に、初めにお礼を申し上げなければなりません。去年の広島大会におきまして、沖縄に本を贈る運動のアピールを採択されましたが、NHKをはじめ国立国会図書館、東大などから、ぞくぞく本が沖縄に届いております。送り届けられた図書は新刊書または十分使えるものばかりで、沖縄の図書館員として、感謝これ

に過ぎるものはありません。また、琉球大学保健学部新設に伴いまして、本土の各大学から雑誌や紀要類の寄贈をいただいていることに対しまして、大学関係者の方々にもこの席を借りまして、お礼申し上げます。

本土復帰を間近に控えまして、沖縄県民は多かれ少なかれ復帰不安を抱いております。図書館関係に例をとりますと、琉米文化会館が全琉5カ所に設けられていましたが、米国民政府の管轄であるため、復帰を前に、那覇の一館のみに縮小されました。20年余を図書館業務に尽くした人達が、図書館に勤めたくても職がなく、転職・転業を余儀なくされています。…略… 復帰をあれほど願った沖縄県民が、返還協定をめぐる対立し、革新側は協定やり直しを訴え、自民党及び経済界の人々は、先ず復帰だということで協定批准促進を叫んでおります。

相次ぐ米軍人犯罪、沖縄人を交通事故死させた米軍人加害者の無罪判決、これに報復するかのように、米人車両のコザ市での焼きうち事件、ドルショックによる経済の混乱、また、11月10日の返還協定反対のゼネストで、警官が死亡するといういたましい事件、更に交通事故に絡む、米人車両の焼き払いがありました。

このように、混乱をきわめている沖縄の社会で、我々沖縄の図書館人は、何をなすべきでしょうか。…後略…」(4)。これら「沖縄に本を贈る運動」やその「事後処理報告」それに対する「謝辞」を読むと、本土側から見た沖縄図書館界の状況が良く分かるのと、沖縄の復帰前の社会状況が写し出されているので少し長くなったが引用した。

4. 南方同胞援護会の寄贈図書

南方同胞援護会は「日本政府が当然なすべき戦後処理を、施政権を掌握していたアメリカとの外交上の摩擦を避けて、代わりにおこ

なうことを目的に1956(昭和31)年11月に設立された財団法人。略称は南援。56年軍用土地一括買い上げをめぐる島ぐるみ闘争が起こったのを契機に、本土各政党はあいついで沖縄問題特別委員会を設置、国会での論議も盛んになった。自民党沖特委では、政府の協力機関設置をきめ、理事に社会党、民社党国会議員(衆参外務委員)をふくめて発足させた。初代会長澁澤敬一、副会長淵上房太郎、事務局長吉田嗣延、理事に高岡大輔(自民党)、島清(社会党)」(5)であった。

その援護事業の中で沖縄の公民館や図書館に図書を贈っている。

「昭和38年度からは、図書不足に悩む沖縄の公民館や図書館を整備する目的で、国庫補助金により、昭和46年度まで継続され、一般教養図書など延べ150,154冊を送付した。とくに昭和39年度では、沖縄戦により沖縄現地では完全に消滅した沖縄関係の戦前の資料や古文献が、本土でも失われつつあるため、沖縄文化協会に委嘱して本土各地でその収集にあたり、稀覯本など古文献1,025冊を現地に送付した。これら贈与図書については、毎回沖縄にある米民政府と事前に目録を調整したうえで、図書の配布についても米民政府を経由しなければならなかったため、送付事務は幅轆し、ときには贈与図書について米民政府からクレームがつけられたことも幾度かあった。」(6)

5. 琉米文化会館の譲渡とそのあと利用

琉米文化会館は全琉を北部、中部、南部、宮古、八重山の5ブロックに分け、名護市、石川市、那覇市、平良市、石垣市の5市に設置されていた。復帰時にこれらの文化会館は日本政府に買い上げられ、各所在自治体に無償で譲渡された。この買い上げは、返還協定や合意議事録により総額がうたわれていて、次のように記されている。「日本政府はアメ

リカ政府に対して、イ 日本に移転される同政府財産および公社財産の対価 ロ 核兵器撤去の費用 ハ アメリカ政府が雇用の分野等で負担する余分の費用、に対し協定の効力発生より五年の期間にわたり、総額3億2千万合衆国ドルを支払う。(返還協定 第6条、第7条および合意議事録)」。⑦)

名護市(北部)、石川市(中部)にあった2琉米文化会館は譲渡後は市の施設として利用され、那覇市(南部)では市立図書館と公民館、視聴覚ライブラリーを併設し、平良市(宮古)では市立文化センターとして、平良市立図書館と公民館的機能を果たしている。石垣市(八重山)では市立文化会館として、再出発した。

6. 沖縄図書館協会から沖縄県図書館協会へ

全琉5地区にあった琉米文化会館を中心に各地区図書館協会が結成されたが、その皮切りは那覇琉米文化会館を中心とする南部地区図書館協会であった。1958(昭和33)年3月19日に設立総会を開いて、発足している。その他の4地区も同年4月には各地区図書館協会を設立している。その加盟機関は文化会館をはじめとして、公共図書館、公民館図書室(部)、学校図書館、大学・短期大学図書館、立法院図書館、企業の図書室・資料室などであった。

1962年7月14日に設立総会をもち沖縄図書館協会が発足して、全琉が一つにまとまる事ができた。その活動としては毎月というくらい開かれたのが、講習会で図書館の管理・運営全般についてもあったが、分類・目録についてが多かった。また、学校図書館研究会や製本講習会なども開いていた。米軍の図書館や米軍基地内の学校図書館の視察や見学なども行われ、バスは那覇琉米文化会館の交渉で軍用バスが提供されていた。毎年読書週間(11月)と図書館週間(4月)がもたれ、

トラックや乗用車でパレードをしたり、図書の展示即売会などが開催された。特に図書館週間には図書館関係の功労者を表彰したり、記念切手を発行してもらったりしている。この図書館週間は国際的で米軍図書館や米人学校の図書館員も参加していた。そのため、米軍の宣撫工作に乗りたくないという理由で、この図書館協会に参加しない人達もいた。南部図書館協会は1964年6月に『みなみの図書館一五周年記念』誌を発行し、沖縄図書館協会は『沖縄図書館協会誌』を1964-1975年・6号まで出している。

祖国復帰が決まった頃から、協会の活動はにぶり、協会の中心的役割を果たしていた各地区の琉米文化会館は那覇琉米文化会館のみに縮小され、更に復帰によって消滅した。

沖縄図書館協会は名称に「県」を加えて、昭和48年4月1日より正式に沖縄県図書館協会となり、沖縄県立図書館が中心的役割を担うようになった。

7. 琉球政府立医学図書館の設立と廃館

医学の情報や研究資料の乏しい沖縄に日本政府援助3,300万円により、1966(昭和41)年2月那覇市与儀に建設され、1967年3月に開館した。琉球政府厚生局の附属機関であった。この医学図書館と琉球大学保健学部図書室とは同一地域内にあったので、琉球大学側から政府立医学図書館を琉球大学へ移管して欲しいとの要望があったが、実現しなかった。本土復帰を前にして医学図書館は廃館となり、建物は厚生局(復帰後は環境保健部)の医務課分室として使用されていたが、後に那覇看護学校の別館となっていた。廃館の理由は明らかにされていないが、巷で語られていた事は「本土各県で県立医学図書館を設置している所はない」ということと「県庁の定員問題がからんでいる」との事であった。蔵書は12,000余冊、雑誌380余種あったが、

復帰後は県立病院や保健所、その他医療、衛生関係の施設や研究所等の必要とする所へ分置されたという。館長以下7人の館員が心血を注いで収集した資料（予算が乏しかったので全国各地から寄贈を仰いだものが多かった）が散逸してしまっていて残念というほかない。館員は県庁や県立図書館、学校図書館等へ分散配置された。悲痛な想いでこの図書館を去ったであろう。

8. 復帰直後の公共図書館

復帰時点における沖縄県内の公共図書館は、県立図書館と名護市立崎山図書館、平良市文化センター（平良市立図書館）、石垣市立文化会館の4館があるのみで、復帰の年の11月に那覇市立図書館が開館している。

沖縄県立図書館

1972（昭和47）年の復帰と同時に琉球政府立図書館は、沖縄県立図書館と改称し、宮古と八重山の分館も、沖縄県立図書館宮古分館、同八重山分館となった。復帰当時の職員は本館13名、宮古八重山がそれぞれ3名であった。床面積は1996㎡余で、所蔵数は61,212冊（本館33,484冊）、貸出冊数年間26,000冊程度であった。復帰後は公共図書館協議会の中核を担って活動している。

名護市立崎山図書館

名護には1896（明治39）年に名護教育部会により私立国頭図書館が設立されていたが、今次大戦で灰燼に帰した。

地元出身の崎山喜昌の寄贈により、1966（昭和41）年12月10日名護町立崎山図書館が発足した。北部の5町村（名護町、羽地村、久志村、屋部村、屋我地村）が合併して名護市が誕生したのに伴い、名護市立崎山図書館となった。旧各町村および名護琉米文化会館にあった図書資料を集め新たな図書館サー

ビスを行うようになった。1階ホールは教育・文化活動に使われ、研修会、講習会、会議等に頻繁に利用された。1977（昭和52）年度頃から文庫サービスとして、地域・家庭・保育所・幼稚園、小中学校文庫そして夏休み自動車文庫等を実施し、幼児・児童サービスに努めている。7万冊余の蔵書を有しているが、町時代の施設であるため、狭隘をきわめている。現在新図書館を建築中である。

平良市文化センター（平良市立図書館）

宮古琉米文化会館は復帰前年から閉鎖され、管理は市に任されていたが、復帰と同時に国から譲渡され、「平良市文化センター条例（昭和48年9月20日条例第34号）に基づき設置された社会教育機関。市民の多様な個人学習・研究・調査に利便を供すると共に、集合学習への機会と場を提供する事を目的とする。敷地面積11万6849㎡。本館鉄筋コンクリート2階建延べ660.43㎡。図書閲覧室、講堂（ホール）、クラスルームを兼ね備えている。所在地は平良市西里。」⁽⁸⁾通常は文化センターというよりも市立図書館と呼ばれている。復帰当時の蔵書冊数は掴めないが、後述する那覇市立図書館の項の那覇琉米文化会館の統計を参照されたい。復帰が決まった前年の統計なので、復帰当時と殆んど同じであろうと考えられる。配本所で資料は集中整理し、5文化会館に同じく配付していたから那覇と平良と大体同じと考えてよいであろう。

石垣市立文化会館

「1952年（昭和27）八重山に設置された文化会館。米国民政府の設置・運営により、八重山琉米文化会館として4月14日に開館。本土復帰（1972.5）に伴い、復帰特別措置に基づいて日本政府より石垣市へ無償譲渡され、石垣市立文化会館と改称。同年12月の条例制定により、石垣市教育委員会の行政管轄となり、現在にいたる。図書館（蔵書数24,500.

1982現在)、ホールなどの機能をそなえ、市民の文化活動の発展に寄与している。所在地は石垣市大川。」(9)復帰当時の蔵書数や席数は後述の那覇琉米文化会館と同じぐらいと考えてよいであろう。

那覇市立図書館

沖縄の本土復帰によって那覇琉米文化会館は、那覇市に譲渡され、暫く閉鎖されていたが、1972(昭和47)年11月1日に市立那覇文化センターとして開館した。企画部に属し、那覇琉米文化会館の図書部と行事部を引き継いだかたちで約3年間活動したが、機構改革により、1975年8月1日、那覇市教育委員会に移管され、名実ともに那覇市立図書館となった。

復帰当時の蔵書冊数は分からないが、1969年発行と思われる『那覇琉米文化会館要覧』の図書室案内には次のとおりとなっている。

1 図書室資料

| | | |
|-------------|--------|---------|
| 蔵書数 | 和書 | 11,000冊 |
| | 洋書 | 5,000冊 |
| 雑誌 | 和雑誌 | 58種 |
| | 洋雑誌 | 30種 |
| レコード | | 1,300枚 |
| 16ミリフィルム | 1,190種 | 1,650本 |
| 幻灯フィルムとスライド | | 680本 |
| 紙芝居 | | 160冊 |
| 2 席数 | | 100席 |

9. 大学および短期大学の図書館

1945(昭和20)年9月2日連合国のポツダム宣言を受託した日本の無条件降伏により、沖縄は本土から切り離された。多くの人材を失った沖縄では、教員不足を補うために具志川村田場に1946年1月沖縄文教学校が創設され、短期間の講習で速成の教員養成を行った。当初沖縄文教学校は教育部、外語

部、農林部からなっていたが、1946年に外語部が沖縄外語学校として独立、翌年の1947年には、農林部が農林高等学校として独立、沖縄文教学校は純然たる教員養成学校となった。これら外語学校と文教学校は1950年琉球大学が設置される際に、吸収される形で発展的に解消した。

この琉球大学が沖縄における最初の高等教育機関である。戦前に沖縄師範学校が1880(明治13)年に創立され、1943(昭和18)年3月に師範教育令改正により官立となり、専門学校に昇格したにすぎない。

私立大学及び短期大学は1957(昭和32)年から1966(昭和41)年の間に、沖縄キリスト教短期大学(当初は沖縄キリスト教学院)、沖縄大学(当初は沖縄短期大学)、国際大学(後に沖縄大学の一部と統合して沖縄国際大学を形成)、沖縄女子短期大学が設立された。

これらの各大学について復帰前後を中心に述べてみたい。

琉球大学附属図書館

沖縄に大学が設置されたのは、1950(昭和25)年5月琉球大学が米軍政府の布令によって首里城跡に設立されたのが最初である。そのため琉球大学は布令立大学と呼ばれたり、その後は琉球政府立となって政府立大学と呼ばれたりした。その附属図書館は大学創立とともに開館し、当初はインフォメーション・センターと呼ばれていて、木造瓦葺き平屋建て241.7㎡(76坪)で、蔵書は約3万冊であったが、これらの図書は米軍および在米同胞(ハワイ更生会他)からの寄贈図書で、洋書が大部分であった。1955年12月10日初代学長であった志喜屋孝信氏の功績を称えて志喜屋記念図書館が落成した。その資金には米軍や琉球住民更には海外同胞の寄付金と1鍵1ドルの景品つき宝くじを22万本発行し、その利益金などが当てられた。地下2階地上3階延べ750坪の沖縄では最初

の5階建の総タイル張りの近代図書館であった。そのため創立当初から地域社会の人々に開放され、公共図書館的役割も果たしていた。祖国復帰によって沖縄県が蘇生し、琉球大学は晴れて国立大学となった。復帰直後の職員数は33名、所蔵数は約180,000冊、雑誌受入数2,651種（和1,453、洋1,298）、年間館外貸出数は約573,500冊、学生数は約4,500名であった。

復帰前にはアジア財団や南方同胞援護会から図書の寄贈をうけたり、また復帰前の2カ年ほど日政援助（日本政府援助）を受け、米国民政府を通じて図書を受け入れたこともあった。現在は65万冊を所蔵する大図書館に発展している。

沖縄国際大学図書館

沖縄国際大学は宜野湾市宜野湾に1971（昭和46）年2月25日に創立された文科系総合大学である。沖縄の本土復帰を前にして、従来からあった私立の沖縄大学と国際大学の二大学を統合して新大学を設立する構想があったが、沖縄大学の一部がこれに反対して、沖縄大学は存続することとなり、統合賛成の教職員と学生は、国際大学とともに新大学に統合された。新大学の名称も両大学の名称を結合させた形となっている。新大学は両大学の資産を全然引き継いでいないので、その面では新設大学であった。そのため図書館は無から発して、当初は2教室160㎡を仮図書館として蔵書約16,000冊を約4,500人の学生にフル回転させて50席をもって提供している状況であった。雑誌受入数は646種（和590、洋56）、年間貸出は7,265冊であった。

1974年9月28日待望の新図書館が開館した。面積2,526.52㎡（764坪）、閲覧席数300で、当時としては沖縄県内では最大面積をもつ図書館としてその偉容を誇っていた。「沖縄に本を贈る運動」もあって、本土の各大学や国立国会図書館などから寄贈図書があっ

て、充実しつつあった。

前年度(1996)から今年度にかけて新図書館を建設中である。沖縄県に於ける最大の私立大学図書館として今後の発展が期待される。

沖縄大学図書館

沖縄大学は初代理事長嘉数昇氏により、那覇市字国場に創立された沖縄に於ける最初の私立大学である。嘉数学園に沖縄短期大学が設立されたのは1958（昭和33）年4月5日であった。沖縄大学は1961年2月17日に設置を認可されている。文学部と法学部の2学部をおき、それぞれ第二学部（夜間部）を置き、更に短期大学部にも夜間部において、勤労青年に大学教育を受ける機会をもたらした功績は大きい。多くの米国留学生を送り出した伝統をもっている。

図書館は本部と兼用のビルで、1960年12月20日に竣工、当初は1階を図書館に当てていたが、1965年3階に移動した。復帰当時は図書館の使用面積は363㎡、蔵書は約28,000冊、席数は96であった。職員は7名、受入雑誌は481種（和416、洋65）、年間貸出冊数は5,000冊余であった。この図書館も「沖縄に本を贈る運動」の寄贈本を県立図書館で配分したものや直接本土各大学から寄贈本を受け入れた。1989年に1,786㎡の図書館を新築した。

沖縄キリスト教短期大学図書館

沖縄キリスト教団によって1957（昭和32）年4月9日に創立された沖縄における最初の私立短期大学である。那覇市首里当蔵にあった首里教会が仮校舎だったので、その一角に図書コーナーを設けて、蔵書は400冊から出発した。ほとんどがキリスト教団からの寄贈で、キリスト教関係の図書が主であった。当蔵の高台に移転した後、1959年に短期大学として認可された。復帰前後の図書館は二号館の2階にあり、面積は177.71㎡、蔵書

数は約16,000冊、職員は3名、雑誌受入数は70種（和62、洋8）年間貸出数は約2,500冊であった。

1989年に西原町キャンパスに移転し、新図書館は1,364㎡で旧図書館の6倍の広さを誇っている。

沖縄女子短期大学図書館

沖縄女子短期大学は1966（昭和41）年3月30日に認可され、那覇市国場に設立された。沖縄における唯一の女子だけの短大である。「白百合の如く気品豊かで、愛情こまやかな、温かみのある女子教育をする」というのが、教育方針である。復帰当時の図書館の使用面積は178㎡で職員数は2名、蔵書数約7,000冊、雑誌受入数98種、年間館外貸出冊数は約1,800冊、閲覧席は60席であった。

この図書館も1987年に新築し、旧図書館面積の4倍以上の736㎡を有しているが、現在は手狭になっている。

10. 復帰前後の専門図書館と特殊図書館

復帰前に専門図書館として知られているものに、立法院図書館と琉球銀行調査部資料室、琉球大学保健学部図書室などがあった。

特殊図書館としては沖縄点字図書館をあげることができる。

立法院図書館（沖縄県議会図書室）

立法院図書館の設置趣旨は、「職員および事務局職員の立法調査研究に資すること。」であったが、県民への公開もなされていた。これは公共図書館が少なかったことにもよるが、琉球政府の各部局が発行する出版物はすべて立法院図書館に収めることになっていた。研究者や学生、一般住民の利用が多かった。復帰直前の蔵書数は約2,300冊を数えていた。職員は7名でミニ国会図書館的な活動をしていた。復帰後は職員も3名に減り、名

称も県議会図書室となった。

琉球銀行資料室（りゅうぎん金融資料館）

琉球銀行は1948（昭和23）年米軍政府布令第1号の一部として公布された「琉球銀行条例」により設立された。資料室は調査部に属していたが、調査部は物価動向の定期調査をし、軍政府に報告するなど、また、1951年4月の琉球臨時中央政府が発足するまでは、琉球諸島の金融機関の監督統制権が与えられ、中央銀行的性格を帯びていた。1951年7月『金融経済情報』を創刊し、情報を住民に提供した。その後『金融経済』に改題し、現在は『経済レポート』として続刊されている。

資料室には米軍占領時代の琉球の金融や経済についての文献や資料が豊富に所蔵されている。復帰後の1988年5月に琉球銀行創立五十周年を記念して「りゅうぎん資料館」が開設され資料室は吸収された。

琉球大学保健学部図書室

（琉球大学附属図書館医学部分館）

医学部の前身である保健学部の図書室が設置されたのは1970（昭和45）年10月5日であった。図書室は128.3㎡で、標本室を転用していた。復帰直後の蔵書数は約14,000冊（うち洋書約9,000冊）、雑誌数228種（和121、洋107）、1979年10月に医学部が設置され、翌年4月新入生を迎えた。那覇市与儀にあった保健学部図書室は西原町の医学部キャンパスに移転し医学部分館となった。

沖縄点字図書館

沖縄盲人福祉会は1957（昭和32）年11月に社会福祉法人として認可され、那覇市松尾で盲人のための福祉活動を続けていた。本土復帰と同時に身体障害者厚生施設として認可された。1973年6月旧建物跡に沖縄盲人センター900㎡を建設した。2階に239㎡の

図書館が設けられた。職員は常勤3名、非常勤6名、蔵書数は点字図書5,623冊、声の図書(録音テープ)1,787巻、年間貸出数は図書282冊、録音テープ1,069巻、登録人数250名であった。

1.1. 学校図書館

沖縄で「学校図書館法」が施行されたのは1965(昭和40)年で、本土に遅れること12年であった。

1968年の中央教育委員会で「学校図書館振興計画」が策定され、全琉に学校図書館モデル研究校を指定したりして、学校図書館の研究振興が図られた。沖縄SLAは1963年結成以来毎年秋に、研究大会を開催し、第七回大会(1971年)は第十六回九州地区学校図書館研究大会と併せて開かれ、沖縄の学校図書館界に大きな刺激を与えた。

沖縄県の学校図書館界が他府県に誇り得るものの一つに学校司書の配置率の高さがある。例えば「小学校でその配置率は82パーセントで2位の佐賀65.1、下位では東京0.6、大阪0.3」¹⁰⁾である。また、研究熱心な教師のいる図書館は他府県の学校図書館に勝るとも劣らないところが多くなってきている。

あとがき

現在は県内全部の市に市立図書館が設置され、那覇市立図書館は5分館を持つまでになった。村立図書館も見られ、金武区図書館のように字(区)立の図書館も設置されるようになって、復帰直後の図書館界と比べると図書館の規模や運営の面から見ても隔世の感がある。しかし、「すべての人に図書を」「知る権利の保障」「地域社会のニーズに応える」という面から見ると、図書館の普及は未だしである。今後の町村立図書館の設立や多くの分館の設置が望まれる。

大学や短期大学の図書館も復帰当時に比べると格段の進歩をとげ、図書館占有面積は各図書館とも4倍以上の増加を示し、蔵書冊数も3~4倍の増加を見せている。更に図書館界は機械化やコンピュータ化が進み、復帰前後の頃とは様相を一変している。例えば学術情報センター(NACISIS)に目録情報の蓄積がなされているが、効果は絶大で、目録作業の面では省力化が非常に進んでいるし、居ながらにして全国主要大学の資料が検索できると言う事は、復帰時点の頃は思いもよらないことであった。今後も図書館の発展発達を願うものである。

〔注〕

- (1)「沖縄公共図書館の成立と展開」 漢那憲治『民衆と社会教育』小林文人、平良研一編著 p231
- (2)「沖縄に本を贈る運動」 酒井梯 全国図書館大会 昭和45年度 於広島市『OLA会報vol.2 no.2』1970.11 p1~2
- (3)「沖縄に本を贈る運動；事後処理報告」 酒井梯 同大会 昭和46年度 於岐阜市『沖縄図書館協会誌vol.2 no.3』1972.5 p2~3
- (4)「沖縄に本を贈る運動への謝辞」 山田勉『沖縄図書館協会誌vol.2 no.3』p2~3
- (5)「南方同胞援護会」 由井晶子『沖縄大百科事典 下巻』沖縄タイムス社 p96
- (6)『南方同胞援護会17年の歩み』沖縄協会編 発行 昭和48年 p98
- (7)『沖縄復帰の記録』南方同胞援護協会編 発行 昭和47年 p252
- (8)「平良市文化センター」 砂川玄正『沖縄大百科事典 下巻』沖縄タイムス社 p320
- (9)「石垣市立文化会館」 高木健『沖縄大百科事典 上巻』沖縄タイムス社 p168
- (10) 全国SLA『学校図書館全国悉皆調査報告』1982